

特集にあたって

昨年（二〇二三年）、宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要が真宗本廟にて厳修された。慶讃法要を通して、「宗祖」としての親鸞聖人に出会い、「浄土真宗」が開かれた意義について尋ねられてきた。

こうした学びを深める中、「浄土真宗を開いた祖とは、師・法然である」と言明する親鸞聖人の視座が確認されている。『教行信証』のいわゆる後序では、「真宗興隆の大祖源空法師」とある。この言葉にも明らかのように、「親鸞が開いた浄土真宗」ではなく、「親鸞が受け止めた浄土真宗」という観点から、立教開宗が捉えられる必要がある。

慶讃法要に向けて、「親鸞が受け止めた浄土真宗」が確かめられてきたが、本号特集では、あらためてそれに先立つ浄土宗開宗——親鸞聖人や幾多の念仏者を生み出した法

然上人による「開宗」——という出来事を課題とする。浄土宗開宗八百五十年と言われる本年（二〇二四年）において、法然上人が浄土宗を開いたことの歴史的、思想的営為について確かめることが本号特集の眼目である。

法然上人が自己の立場として宣言した「浄土宗」とは、「ただ念仏」、「選択本願念仏」という思想が核心である。それは、「ただ」「選ぶ」とあるように、他の立場を許さないような、ただ一つの思想に固執するものとして捉えられることもある。しかし、法然直弟達を見れば多彩な思想があり、浄土宗開宗は、様々な人生の軌跡を歩む念仏者を生み出していった。これは一体、どのような事態なのであろうか。本号特集で、このような多様な「人」を生んだ法然上人の歴史的、思想的営為を見つめていきたい。

浄土宗開宗の歴史的意義としては、浄土宗の「独立」という面が強調されてきた。法然上人以前にも日本の各宗派で「浄土」について学ばれてきたが、仏教の根本として取り上げられているわけではなかった。そうした中で、「浄土」こそ仏教の根本であり、「ただ念仏」による往生浄土を示した浄土宗開宗は、確かに歴史の画期である。

ただ、法然上人は釈尊一代の教えを見る立脚地として「浄土」を見出したのであり、つねにその眼は仏教全体に開かれていた。例えば、法然上人は、仏教全体を念仏に導くものだと捉え、さらには、「浄土を宗とする人も、一切経なお大切なるべきことなり」(『逆修説法』)と述べている。このような仏教全体を重んじる姿勢が、法然直弟達の多様な学びを生み出したと見るべきではないだろうか。

法然上人が仏教全体を重んじるとしても、その核心はあくまでも我々に念仏一つが選り取られたという「選択本願」の思想である。法然上人は「選択本願」を説き、そこには聞く者が生まれたのである。それが親鸞聖人である。仏教において「選択本願」の道が示されたとしても、それをどのように聞き、受け止めるかという課題がある。本願

を聞き、仏道を歩む者になっているのかという問いかけは、「法然と親鸞」を語る上で重要な問いとなる。

しかし、「法然と親鸞」という連続性よりも、法然を超えた親鸞、法然から独自の道を歩んだ親鸞、という観点はつとに提示されてきた。例えば、法然に対して親鸞の思想は「絶対他力」であるなど。このような用語の歴史的背景を含め、再検討する必要があるのではないだろうか。

本号特集は、以上のような課題のもと、「法然と親鸞」を確かめる視座を示した研究論文三本を収める。また、「法然と親鸞」について疑問を探究するQ&Aのコーナーや、「法然と親鸞」に関する典籍研究」として研究動向を新設した。さらに宗派内外からの随想四編、山田恵文氏の講演録「親鸞聖人と『西方指南抄』」を収録する。

法然上人の教えを聞いた地、吉水のことを親鸞聖人は終生憶念していた。法然上人が語った言葉とは、つねに振り返るべき原点であり、かつ念仏者としての自身の歩みを続けさせる原動力であったのであろう。そうした念仏者の原点であり、原動力について「親鸞」と共に聞き聞く特集となれば幸いである。